

せんいつ
銭乙の〈治療世界〉：

ケア・キュア・コア

角屋 明彦

Qian Yi, His System of Healing :

Care, Cure, Core

KADOYA, Akihiko

Abstract

In the era of North Song (北宋), Qian Yi (銭乙) started life as an orphan and then went on to become a doctor to children, establishing pediatrics. For him, being an orphan was the element of “care” and the establishment of pediatrics was the element of “cure”. At the deepest stratum of his healing system exists self-healing, which was the “core” of his system.

要 旨

北宋に生きた銭乙の〈治療世界〉のエッセンスを時代環境から考察する。孤児としての彼が〈孤〉の慰藉というケア (care) に始まり、やがて小児科学の整備に尽くし、〈児〉の治療というキュア (cure) に取り組んでいった。彼の〈治療世界〉の深層には〈己〉の治癒というコア (core) が存在していたのである。

キーワード

銭乙 (Qian Yi)

〈治療世界〉 (healing system)

ケア・キュア・コア (care, cure, core)

はじめに

中国医学は〈経絡〉という流れを想定する。個人のレベルにおいては、生命活動を流れとして把握し、その流れに停滞や不全が発生することを〈病〉と理解して改善を働きかける。それがこの医学における治療である。しかし、〈経絡〉は人の体のなかにだけ存在するものではない。中国医学史そのものも一つの流れをなし、時代に応じてさまざまな要件との相互の影響関係が生じ、そのなかでたくさんの〈治療世界〉が生まれた。それらのつながり、つまり〈治療世界系列〉は中国文化の体内を流れる、あたかも〈経絡〉であると言える。本稿ではその〈経絡〉上の一つの〈経穴〉、北宋の銭乙^{せんいつ}⁽¹⁾が構築した〈治療世界〉がどのようなものであったのかを時代環境との関係で考察する。

第一章 北宋という時代：〈個〉の増大

紀元前から紀元後への転換は今から約二千年前のことであった。中国ではこの区切りに至るまでに既に春秋・戦国時代、そして統一王朝・秦の時代を経て、二百年に及ぶ前漢時代もほぼ終わろうとしていた。そしてその頃には現在の中国医学の診断・治療の理論と技術は、その基礎ができていた。この区切り以降、約一千年の間に、後漢時代、三国時代、南北朝時代、そして、隋、唐と時代は進み、宋の時代に辿り着いた。約一千年の研鑽の歳月を経て、宋の時代になったのである。

周知のごとく907年に唐朝が滅亡すると、その後の混乱期に後梁・後唐・後晋・後漢・後周と王朝は小刻みに交替した。その最後の後周の世宗（在位：954～959）に仕えた武人・趙匡胤が五代・約五十年の歴史に終止符を打って創り上げたのが宋朝である。それは960年のことであった。しかし、異民族・女真族が建てた金からの圧迫により1126年に一度、滅亡する。そして1127年にはそれまでの全土支配から南半分に領土を縮小して宋は復興し、モンゴル族・元によって1279年に滅亡するまで命脈を保つ。この約三百年の王朝の前半が北宋、後半が南宋である。銭乙はその北宋に生きた人であった。

第一節 中央集権官僚政治システムの肥大

趙匡胤は即位して宋朝を創った。初代・太祖（在位：960～976）である。太祖は国初の宰相として、読書人・范質^{はんしつ}を任命した。范質は後周時代に科挙に及第した進士であった。読書人とは士人とも言われ、知識人、とりわけ科挙をめざす者、もしくは科挙に及第した者を言い、読書とは受験勉強を意味する。太祖は旧来の地方権力者・節度使の権限を削減し、科挙出身の官僚を重用した。范質についての記述が正史に残っている。

○五代以来、宰相多く方鎮^{ほうちん}より取給す。質始めて之を絶つ。（『續資治通鑑』巻4）

方鎮とは節度使を指す。唐朝の三省六部の官制は形骸化し、節度使が地方の権益を享受していた。太祖はその節度使に代えて文官を国政の中枢に据えたのである。

ただ、宰相がすべて科挙出身というわけでもなかった。范質に続いて宰相になった趙普は実務家肌であって学問の素養がなかったが、常々太祖から強く学問を勧められた。

○普^{わか}少きとき吏道を習ひ、學術寡し。相と爲るに及び、太祖常^{はな}に勸むるに讀書を以てす。晩年手に卷を釋たず。私第に歸る毎に戸を闔ち篋を啓き、論語を取りて之を讀むこと竟日なり。(『續資治通鑑』卷16)

趙普は太祖の勧めに従って『論語』を座右の書として政務を執ったのである。太祖が文官に信頼を厚くしてゆくなかにあって、乾徳三年(965)の蜀鏡事件は象徴的であった。

○帝今元に改むるに、宰相に命じて前世に無き所の年號を讓し以て進ましむ。……帝舊き鑑を得るに、其の背に乾徳四年鑄るの字有り。帝大いに驚き、鑑を出だし以て宰相に示す。皆答ふること能はず。乃ち學士・陶穀、寶儀を召し之を問ふ。儀曰く、此れ必ず蜀の物ならん。昔僞蜀の王衍に此の號有り。當に是れ其の歲に鑄る所の物なり。(『續資治通鑑』卷4)

元号を乾徳に改めた当初、古い鏡の背面に「乾徳四年鑄る」の銘文があるのを見た太祖は奇異に思い、宰相にそのわけを尋ねたが答えが得られなかった。しかし、ひとり翰林學士・寶儀のみが、前蜀の時代に乾徳の年号があることを奉告した。そのため太祖は宰相の無学浅識を嘆き、学問の必要性を痛感したのであった。

○帝乃ち嘆きて曰く、宰相は須らく讀書人を用ふべし、と。是れより益々儒臣を重んず。(『續資治通鑑』卷4)

こうして軍人皇帝・太祖は文官重視の皇帝独裁政治体制を整えていった。太祖の弟・趙匡義が第二代・太宗(在位：976～997)となり科挙を大々的に行なうと、皇帝の任命になる文官が地方官として全国に配置された。『文献通考宋登科記総目』と『皇宋十朝綱要』によれば進士の員数だけでも、太祖(173名)、太宗(1368名)、真宗(1954名)、仁宗(3755名)、……と急激にその数が増えていったのがわかる。⁽²⁾

政府内に文官の数が増すと当然ながら各部局の職務内容が細分されてゆくことになる。それはあたかも体内の細胞数が増大し、それに伴って諸器官が充実してゆくようなものである。宋朝は中央集権官僚国家であると言われるのは、換言すれば、未成熟の部分が存在する青年の肉体が成長して成熟した壮年の肉体になったということである。しかし、それは必ずしも良いことであるとは限らない。それはまた老化の始まりを意味する。第3代・真宗(在位：997～1022)は契丹族の遼の侵入に抗戦し1004年に講和条約を結んで、宋から遼への歳費支払・遼の聖宗を兄とする・国境の現状維持を取り決めた。所謂、澶淵の盟を結んだのである。その結果、以後の約百二十年間、平和が続くことになったが、これは政治変化の減速、官僚層の膨大化、などを招いた。宋朝は肥満していったのである。第4代・仁宗(在位：1022～1063)の時代はタンゲート族の西夏との軋轢が高まり、重なる軍事費支出や巨額の歳貢を支払いと引き換えに得た和平であり、それらにより財政窮乏を來たした。第5代・英宗(在位：1063～1067)の時代は短く終わったが、二十歳の若さで帝位に就いた第6代・神宗(在位：1067～1085)は王安石を登用して新法の改革を進めさせた。王安石がこの財政危機を打開することを主眼とし、冗官併廃、人員削減、財源開発の新法の改革を進めたことは周知の史実である。皇帝を頂点とするピラミッド型をなす国家構造の末端部は重税に冷え切っていた。王安石はこの末端部の体熱回復を図った。改革はしばらくの間は歓迎されて国家財政は好転したが、やがて利権を削減された大地主などの中間層の

突き上げが保守派の原動力となって、革新政治は瓦解していった。膨大な数の文官たちは保守派＝旧法党と革新派＝新法党に分かれて対立・抗争を繰り返した。⁽³⁾そして、この状態は、第7代・哲宗（在位：1085～1100）、第8代・徽宗（在位：1100～1125）と続き、徽宗・欽宗が女真族の建てた金に捕らえられ北宋王朝は滅亡する。靖康の難である。ともあれ、北宋の政府・政治の変化は、科举制度を根幹として機構が細分化し、細部に亘って文治政治が進展していった、良し悪しの両面があるろうが、まさに〈個〉が増大していった時期であったと言えよう。

第二節 医療領域での分化現象

唐朝が滅亡した907年から宋朝が成立する960年を経て979年に国内統一が完成するまでの五代十国と言われる時代は戦乱に明け暮れる時代であった。黄河流域の後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五代はいずれも長期安定した王朝ではなかった。江南や華南の前蜀・後蜀・呉・南唐・閩・楚・荆南・南漢・呉越・北漢の十国もほとんどが唐宋の節度使が自立・割拠したものであり、これらが互いに攻防を繰り返したのであった。加えて、異民族による圧迫が北から西からあり、漢民族は南に大きく移動して、中国南部に人口が集中していった。殊に都市部が稠密化すると、時には戦鬪で、また時には長期間の包囲を受けての籠城で都市内の衛生管理が極端に悪化した。それは疫病の頻繁な発生をもたらすことになる。『宋史』に北宋時代の疫病の記録を拾う。

○淳化五年六月、京師に疫あり。太醫を遣はし薬を和へ之を救はしむ。

○至道二年、江南に頻年 疾疫多し。

○大觀三年、江東に疫あり。

○建炎元年三月、金人 汴京を圍む。城中に疫あり。死者半ばに幾し。（以上『宋史』志）

というように、淳化五年（994）、至道二年（996）から連年、大觀三年（1109）、建炎元年（1127）の計四回の記録がある。特に1127年に金軍が首都・汴京を包囲した際は悲惨を極めた。城壁を盾に籠城する人々の半数が死亡したとある。当然ながら記録に残らない疫病は数え切れないほどであったことは想像に難くない。この状況にあって、一般庶民は神に頼る以外にしようがなかった。蘇軾（1036～1101）の「潮州韓文公廟の碑」のなかに、

○潮人の公に事ふるや、飲食に必ず祭り、水旱疾疫、凡そ求むること有れば必ず禱る。

とある。「公」とは韓愈を指す。中唐の頃、皇帝・憲宗が仏舎利を宮中に迎えた819年、刑部侍郎の職にあった韓愈は「仏骨を論ずる表」を奏上してこれに反対した。外来の仏教を受容することで中華古来の秩序・原道を乱すと諫めたのである。憲宗の怒りを買った韓愈は潮州に流謫となるが、翌年、憲宗は宦官に殺されるという不慮の死を遂げる。のちの世に潮州の人々は韓愈を神格化して廟を建て、水害・旱魃・疫病にはその加護を祈るようになり、宋代に至って蘇軾がこの廟の碑文を起草したのである。この一文は庶民が疫病に対して祈禱する以外にすべがなかったことの証拠でもある。時あたかも朝廷では王安石が新法の改革を進めていた。旧法党に与する蘇軾は左遷され、地方の現実に直面していた。そして私費を投じて伝染病患者の収容のために安東坊なる施設を作るに至る。

こうした疫病が爆発的にかつ頻繁に蔓延する現状に、旧来の医療知識と医療技術ではなすすがほとんどなかったのは事実で、王侯や大商人といった社会の上層部の比較的少数の層を主たる

対象としていた中国医学は、患者人口の急速な広がりには対処のしようもなかったのである。『宋史』を見ると疫病の記録は南宋では二十七回、約五年に一度の頻度となる。そうなると当然ながら疫病対策が見直されることになる。病める〈個〉の増大がまずは疫学の変革を促したのである。しかし疫病と言っても、その内容は発疹チフス・インフルエンザ・ペスト・コレラ・痘瘡・麻疹・赤痢などが考えられるが、こうした多様な疾病はそれまでの〈傷寒〉という概念では精確に把握し、処置することが不可能に近かった。⁽⁴⁾ 宋朝はこの点の見直し作業に着手した。1057年に校正医書局が設置され、運氣論による新たな解釈も加えられ、⁽⁵⁾ 1065年に『傷寒論』、1066年に『金匱玉函経』、……と校正成果を刊行していった。折りからの印刷術の盛行は書籍の大量生産を可能にして医術の知識・技術は秘伝のベールの中から外に出されて多くの医家に浸透していった。これもこの時代の〈個〉の増大の一現象であった。しかし、それにもまして患者の〈個〉の増大に対する対処は極めて困難であった。疫病対策の遅れはそののちも続くことになる。⁽⁶⁾

医療の別の領域に目を転じよう。〈個〉の増大は、医療の個々の領域にも変化をもたらした。北宋にあってその顕著なものは小児科医学の領域であったが、これは次章で述べるとして、この傾向が南宋になると、宋慈（1186～1249）が変死体の検査方法、自殺・他殺の識別法、死因・死亡時期の鑑定法、生存者の蘇生・応急処置法などを整理して1247年に『洗冤集録』五巻を著し、法医学の形成に貢献した。また、陳自明（生卒年不詳）は婦人科疾病の病因、症候、治療法を整理し、1237年に『婦人大全良方』を著して婦人科医学の発展に寄与した。本来、中国医学は一人の治療師が患者の身に発生し変化してゆく〈病〉を有機的総体として全体的に診察・治療するものであって、今日で言う外科・内科・眼科・婦人科…というような独立した個別の〈科〉はない。しかし、それまでの経験の蓄積と研究の進展は各領域での細部の充実を促し、実質的には個別の〈科〉を成立させる結果を生んでいった。〈個〉の分化傾向がめざましいのである。この背景のなかに、小児科医学の錢乙を見据えることにする。

第二章 錢乙の〈治療世界〉

錢乙は北宋の第4代・仁宗（在位：1022～1063）に鄆州（現在の山東省東平県）に生まれた。生年には諸説あるが、1030年前後であろうと思われる。この時期、北宋は半ばあたりにさしかかろうとしていた。この仁宗の世は、太平の世とは言われるものの、その実、外交は西夏に圧迫され、内政は飢饉や疫病に苛まれて世情が不安定であった。天聖、明道、景祐、宝元、康定、慶曆、皇祐、至和、嘉祐、と四十二年間の統治に九回も年号を改め、そのたびに刷新をめざした。途中、慶曆の治（1041～1046）と称する改革がなされた時が仁宗統治の最盛期でありかつまた宋王朝の最盛期であったが、それ以降は衰退の一路を辿ることになる。前章で見たようにさまざまな面で〈個〉が増大するこの時期に錢乙はいかなる〈治療世界〉を創っていったのであろうか。

第一節 〈孤〉

○幼くして父無きを孤と曰ふ。（『孟子』梁惠王）

とある。齊の宣王が政治の要を訊ねたとき、孟子が王道政治の実例を示して答えたなかに、古い

て妻のないのを鰥、老いて夫のないのを寡、老いて子のないのを独、幼くして父のないのを孤、これらは天下の窮民であって、その昔、周の文王は他に優先してこの四民に仁を施しました、という言葉がある。この世に生を享けて三年、錢乙の置かれた状況はまさにこの〈孤〉であった。

錢乙の伝記は『宋史』列伝第221・方技下にあるものと、彼の知人・劉跂が著した「錢乙伝」⁽⁷⁾である。前者はやや簡略的であり、後者はそれに比して詳細な記述である。これらにもとづいて彼の事績を辿ることにする。

○父の顛は醫を善くす。然れども酒を嗜み遊を喜ぶ。一旦 東のかた海上に之きて反らず。乙方に三歳なり。母前ち死す。姑の呂氏に嫁すもの哀れみて之を収養す。(『宋史』列傳)

○父の顛は鍼醫を善くす。然れども酒を嗜み遊を喜ぶ。一旦 姓名を匿し、東のかた海上に遊び、復た返らず。乙時に三歳なり。母前ち亡ず。父の同産 醫の呂氏に嫁すもの其の孤なるを哀れみ、収養して子と爲す。(劉跂「錢乙傳」)

父親の名に相違があるが、針医であった。酒好きで遊び歩き、ある日 海に向かって旅立ち、その後帰って来なかった、とある。

鄆州は古くから信仰の山である泰山に近い。五岳の一つ、道教の聖地であり、神仙思想の濃厚な土地柄であった。上記の二つの記述のみでは詳細がわからないが、東に広がる黄海の彼方に仙境を求めて出て行ったのかも知れない。紀元前三世紀の秦の世、全国統一を果たした始皇帝は永遠に君臨することを望み、不老不死の仙薬を求めて各地を巡遊した。泰山で天地の神々に祈りを捧げる封禪の儀を営み、そして仙人の住むという三つの山を東海の沖に望んだ。海の向こうに見える蜃気楼に目を凝らしたことであろう。

○齊人徐市等 上書して言ふ、海中に三神山有り。名づけて蓬萊・方丈・瀛洲と曰ふ。僊人之に居る。請ふ、齋戒して童男女と輿に之を求むることを得ん、と。是に於て徐市をして童男女數千人を發し、海に入りて僊人を求めしむ。(『史記』秦始皇本紀)

仙人に会えれば不死の薬を得ることができる。始皇帝はそれを手に入れようとして多くの者を東海の彼方に派遣した。しかし、徐市らは帰らなかった。錢乙の父親が医術の現状に限界があるとして別の可能性をもとめたのか、そしてかの始皇帝と同じように神仙に憧れたのか、それはわからないが、家を捨てて海の向こうに出て行った。母親は既に亡くなっていたので、あとに残された三歳の子・錢乙は孤児となったのである。

父親の姉か妹かは不確かであるが、医者に嫁いでいたおばが孤児になった錢乙を引き取って養育した。そうした事情は三歳では理解しようもなく、その後の日常のなかで記憶も薄れていったことであろう。

○長じて(呂氏)之に醫を誨ふ。(『宋史』列傳)

○稍々長じ、書を読み、呂君に従ひ醫を問ふ。(劉跂「錢乙傳」)

錢乙は呂氏を本当の父と思って疑いもしなかったに違いない。このおじは錢乙に医術を教えた。そして、やがて、おそらく錢乙が成人してからか、錢乙が実子ではないことを伝えた。錢乙は大きな衝撃を心に受けたが、本当の父親に会おうとして何年もかかって探し、探し出して郷里に連れ帰った。それは錢乙三十歳の時であった。

○告ぐるに家世を以てす。即ち泣き、往きて迹尋せんことを請ふ。凡そ八九反、數歳を積み、遂に父を迎へ、以て歸る。時に已に三十年なり。郷人感慨し、賦詩もて之を詠ず。(『宋史』

列傳)

○母 將に没せんとし、乃ち告ぐるに家世を以てす。乙 號泣し、往きて父を^{たづ}迹ねんと請ふ。凡そ五六たび往き、乃ち所在を得。又數歳を積み、乃ち迎へ以て歸る。是の時 乙は年三十餘なり。郷人感慨し、爲に^{なみだ}泣下るもの多く、詩を賦して其の事を詠ず。(劉跂「錢乙傳」)

二つの史料を併せると、その後、養父・実父に子として尽くしたことがわかる。

○其の呂に事ふること父に事ふるがごとし。呂没し、嗣無し。爲に収葬行服す。(『宋史』列傳)

○後七年、父壽を以て終ふ。喪葬は禮のごとくす。其の呂君に事ふること其の父に事ふるがごとし。呂君没し、嗣無し。之が爲に収葬行服す。其の孤女を嫁とす。歳時の^{さいきやう}祭享皆親と等し。(劉跂「錢乙傳」)

錢乙の生涯の起点は彼自身が孤児という孤独な境涯にあった。後に小児科学を確立してゆく、彼の〈治療世界〉の根底に〈孤〉という大きな要素があったのである。

第二節 〈児〉

錢乙と同時代を生きた政治家の梅堯臣(1002~1060)は生涯で幾人か子を亡くした。1048年、彼が四十七歳の時の詩に「戊子三月二十一日に^{をさな むすめ しょうしょう うしな}小女・稱稱を^{いた}殤ふ」(三首)がある。

○汝を生みて父母は喜ぶ	汝の死して父母は傷む
我が行なひに豈に虧くる有りしか	汝の命の何ぞ長からざりしや
^{からす} 鴉の雛は春に ^す 窠に満ち	蜂の子は夏に ^す 房に満つ
毒の ^{はり} 螫と ^{こま} 悪しき ^な 噪と	生まるる所は遂に飛揚す
^{ことわり もと なじ} 理は固より ^{あを そら} 詰るべからず	泣涙して蒼き蒼に向かふ

三連作の其一である。おまえの短い命は、私の日頃のどんな至らなさのせいというのか。不吉な声で鳴く鴉も毒針で人を刺す蜂も巣いっぱいの子は元気いっぱい飛び回るのに。天の理は不条理なもの。天を責めてもしかたがない。ただ涙溢れる目で蒼い空を見上げるばかり。……心の内を直截に詠いあげる。其三には

○高さ広さ五寸の棺	此れに千歳の恨み ^{うづ} を埋む
-----------	----------------------------

の句がある。実に悲壮な心境である。子を亡くした悲しみを詠う人は彼のみにとどまらない。前述の蘇軾も1084年、四十八歳で男の子を亡くした。「去歳の九月二十七日、黃州に在りて子を^{とん}生めり。名は遯、小名は乾兒。……今年七月二十八日に至り、病んで金陵に亡ず。……」と題する二首の詩がある。其二から冒頭部分を引用する。

○我が涙は猶ほ ^{ぬぐ} 拭ふべし	日々に遠ければ當に日々に忘るべし
母の哭するは聞くべからず	汝と俱に亡せんと欲す
故衣 尚ほ架に懸かり	漲乳 已に床に流る ……

蘇軾は言う。日がたてば忘れられるから私の涙は拭えばよい。だがおまえと一緒に死にたいと慟哭する妻の^{いとこ}声は聞いて耐えようもない。生前の着物はまだ衣桁にかかり、張った乳房からこぼれる乳は床を濡らす。……子を亡くした親の悲しみは果てしなく深い。しかし、詩に思いを詠むことも知らぬ庶民には己の子を失った悲しみを表すすべもなく、その嘆声は史書にも残りよう

がない。

古来、幼い子供を病苦から救う手だては講じられてはきた。靈枢にある次の一節が象徴的である。

○黄帝曰く、嬰兒を刺すは奈何と。岐伯曰く、嬰兒は其の肉脆く、血少なく、氣弱し。此れを刺すは豪鍼を以てし、淺く刺して疾く鍼を發す。(靈枢・逆順肥瘦)

大人の患者よりも刺激の量を少なく、弱く調整する。子供は大人の縮小版であるから治療刺激を軽減するという考え方である。確かに外見は小さい大人である。けれども錢乙はそのようには看做さなかった。そこに彼の小兒科学の特徴がある。錢乙は言う。⁽⁸⁾

○小兒は母腹の中に存り、乃ち骨氣五藏六府を生ずるも、成りて未だ具全ならず。生まるるの後より即ち骨脉五藏六府の神智を長ずるなり。變とは易なり。(『類證註釋錢氏小兒方訣』卷1)

錢乙は小兒は成人とは異なる身体をもった存在であると捉えた。そして不完全から完全に向けて漸次変化してゆくものであるとした。

○蓋し兒は至りて小なれば、虚し易く、實し易し。多くは即ち熱を生ず。(『類證註釋錢氏小兒方訣』卷4)

小兒の特徴は虚しやすく、また実しやすい。そして変化の過程で発熱する。このような考えに立脚し、変化を捉えるために五臟弁証を小兒科学に援用したのである。彼の治療活動は徐々に世間から認められるようになり、やがて都・開封に上る。そして王族の子女を治療して高い評価を得る。彼が神宗の孫娘を診療した話は有名である。

○京師に至り、長公主の女の疾を視、翰林醫學を授けらる。(『宋史』列傳)

と、『宋史』は簡略的であるが、劉跂「錢乙傳」はやや詳しい。

○元豐中、長公主の女 疾有り。召して之を視しむるに功奏有り。翰林醫學を授けられ、緋を賜る。(劉跂「錢乙傳」)

○初め長公主の女 泄痢を病み、方に殆し。乙方に酔ひて曰く、當に發疹して愈ゆべしと。駙馬都尉以て然らずと爲し、怒りて之を責むるに、對へずして退く。明日 疹果して出づ。都尉喜び詩を以て之に謝す。(劉跂「錢乙傳」)

二ヵ所に分けて書かれている。酒に酔って診察した錢乙に公主の夫である駙馬都尉は怒ったが、診断通りに発疹が出て快癒したので、翰林医学を授けられたとある。

錢乙は方剤にも工夫を加えた。なかでも八味丸から六味丸を創製したことは名高い。本来、八味丸はその名の通り八種の素材を用いる。『金匱要略』には、

○乾地黄、山茱萸、薯蕷、澤瀉、茯苓、牡丹皮、桂枝、附子。右八味 之を末とし、煉蜜にて和し、桐子大に丸じ、酒もて十五丸を下す。日に再服す。(中風歴節)

とあるが、小兒は腎陰が充実しておらず、火を補する必要がないとの考えにより、

○熟乾地黄、山茱萸、乾山藥、白茯苓、澤瀉、牡丹皮。右末と爲し、煉蜜にて和し、丸ずること梧桐子の大きさのごとくす。三歳已下は二丸より三丸に至り、温水もて空心にて化下す。(『類證註釋錢氏小兒方訣』卷5)

とし、桂枝と附子を除き、また服用法にも考慮を加えた。この他にも従来の六君子湯から半夏を除いた異功散、そして導赤散、瀉黃散、益黃散、瀉青丸、瀉白散など多くの方剤を創製した。彼

は小児には小児の医学があるべきことを主張し、個別科学としての質的自立をめざした。銭乙の〈治療世界〉は小児の治療を主軸として構築されていったのである。

おわりに 〈己〉

北宋の世に生きた銭乙の事績を史料のなかに読み取ろうとした。彼を包んでいた北宋の時代はさまざまな面で〈個〉の増大する時代であった。政府機構は科挙が整備されるに従って人員が増し、部局は細分化され、やがてそれは改革派と保守派の党派争いになっていった。一方、飢饉や疫病によって医療の対象人口数が膨大なものになっていった。こうした時代環境に孤児として人生のスタートを切った銭乙にとって〈孤〉の慰藉が潜在的にも顕在的にも人生のテーマであったであろう。青年・銭乙の父親探しが果を結んでこの課題は解決を見た。そして気がついてみれば自分は小児科学、即ち〈児〉の治療を軸とする医師になって王室からも認められるまでになっていた。〈個〉の増大する時代に〈孤〉を慰藉（ケア：care）し、〈児〉の治療（キュア：cure）に身を挺した。彼の〈治療世界〉の極めて深いところに〈己〉の治療という核心（コア：core）が存在していたと言えるのではないだろうか。

注

- (1) 銭乙の生卒年には諸説ある。陳夢賚、《中国历代名医傳》、科学普及出版社、1987年1月には「約1020～1101」、《中医大辭典》、人民衛生出版社、2004年4月には「約1032～1113」、陳存仁、《中国医学史圖鑑》、香港上海印書館、1968年5月には「1035～1117」、《簡明中医辭典》（修訂本）、人民衛生出版社、1986年6月には「約1032～1113」とある。
- (2) 『續資治通鑑長編』では、太祖（171名）、太宗（1172名）、真宗（1347名）、仁宗（4010名）、……である。数字は、荒木敏一、「宋代科挙登第者数及び状元名表」（同、『宋代科挙制度研究』、東洋史研究会、1969年3月、付篇）にもとづいて計算した。相違があるが、急激な増加の様子はつかめる。
- (3) 王安石の歴史的評価については、小林義廣、『王安石：北宋の孤高の改革者』、山川出版社、2013年8月などが詳しい。実は彼が新法の改革を推進する宮中に銭乙もいたのである。
- (4) 小高修司、「蘇軾（東坡居士）を通して宋代の医学・養生を考える：古代の気候・疫病史を踏まえて『傷寒論』の校訂を考える」、『日本医史学雑誌』、50-3、2004年9月は、原『傷寒論』の時代、つまり漢代から五胡十六国時代は寒冷気候が多く、狭義の〈傷寒〉の対策であったが、隋唐宋時代は温暖多雨であって温熱病、広義の〈傷寒〉の対策が必要であり、その背景のなかに宋代の『傷寒論』を捉える必要があると指摘する。
- (5) 石田秀実、「新理論としての運氣論」（同、『中国医学思想史：もう一つの医学』、東京大学出版会、1992年7月、第5章の1）がこの事情に詳しい。
- (6) 宋朝の疫病などに関しては、宮下三郎、「宋元の医療」（藪内清編、『宋元時代の科学技術史』、朋友書店、1997年12月所収）を参照されたい。
- (7) 劉跂、字は斯立、号は学易老人。元豊年間（1078～1085）の進士で朝奉郎に進んだ。彼の手になる銭乙の伝記は著作集『学易集』巻7にある。本稿への引用は、台湾商務印書館の四庫全書珍本別輯による。
- (8) 銭乙の著作は、注（7）の劉跂の伝記によれば、『傷寒指微論』五卷、『嬰孺論』百篇があったとされるが現存しない。しかし、銭乙の論述と方剂を弟子の閻孝忠が編校した『小兒藥証直訣』がある。上は脈証と治療法、中は医案、下は処方^{えんごちゅう}の三部構成である。これを1763年に『類証註釋錢氏小兒方訣』として刊行したものを収録した『小兒藥証直訣』、和刻漢籍医書集成、エンタプライズ、1988年12月 から引用する。

